

実践報告

地域貢献活動を素材とした看護大学生への教育実践

中島 優子

I はじめに

京都看護大学では、京都の大学から全国・世界へ「健康を大事にする文化」を発信し、広げていくことを目指した「ヘルシーキャンパス京都ネットワーク」に2018年より参画した。同年10月にはヘルシーキャンパス宣言を行い、学生・教職員をはじめとした全ての人々、社会の健康増進を実現するために、様々な取り組みを行っている。さらに、2020年の「中京区役所との包括協定（産学連携）」を締結後は、大学と地域住民が協働の健康づくりに取り組んでいる。この協定（産学連携）は、両者がそれぞれ持つ人材、知識、情報等の資源を活用し、連携・協力していくことにより、地域の活性化及び大学の教育・研究活動の活性化に寄与することを目的としている。教員は、大学と地域住民の協働の健康づくりの活動にあたり、学生が「健康を志向する態度を人々が身につける支援」を体験する環境を整えるための地域の人々との橋渡しとして機能するよう（井上, 2021）取り組みを進めている。今年度は、地域住民発信による「すこやか健康体操」への参画を行なった。その概要について報告する。

II 教育実践への取り組み

1. すこやか健康体操

すこやか健康体操の発足は、コロナ禍の渦中である2020年10月に遡る。大学が位置する学区社会福祉協議会が地域の高齢者に対するフレイル予防対策事業（地域定例事業）として端を発した。対象については、地域住民の概ね65歳以上の者とし、毎週土曜日の9:00～9:45に地域の公園で開催している。地域住民の参加状況は、2022年度前半期の月別で212人～430人に及ぶ。本学は10月～11月にヘルシーキャンパスに関わる地域貢献の一環として、「すこやか健康体操」の活動へ参画することとした。

2. 学生の活動内容

筆者らは、学区社会福祉協議会から発信された「すこやか健康体操」の目的と内容を学生と共有した。また、学生健康委員が中心となり活動を推進していった。その際、活動内容の精選にあたっては、学生自らの判断、考えにもとづいて行動し、大学で学んだ看護学の知識・技術・態度を礎に、その成果を地域住民へ還元できるよう助言した。

表1 すこやか健康体操での活動スケジュール

回	日程	時間	活動内容	学生数
1	10/22	8:00	公園での清掃活動	6
2	10/29	8:30	体操前の健康チェック	7
		9:00	すこやか健康体操への参加	
3	11/5		呼吸法の伝達・共有	4
4	11/19	9:30	後片付け・地域住民との交流	4

その結果、「1. 公園での清掃活動」、「2. 体操前の健康チェック」、「3. すこやか健康体操への参加」、「4. 呼吸法の伝達・共有」、「5. 後片付け・地域住民との交流」に主眼を置き取り組むこととなった。詳細については下記の通りである。また、活動スケジュールについては表1に示す。

1) 公園での清掃活動

すこやか健康体操は、公園の清掃活動から始まる。地域住民の方々とともに落ち葉拾いや危険物の除去等を行う。この活動の意義について発問すると学生は、「地域貢献の一環として、住民の方々が気持ちよく1日を始められるように取り組む」との発言がみられたものの看護学の知識との関連については触れられなかった。そこで、患者のベッドサイドで行う環境整備の想起を促し、看護の技を地域活動に生かしていることを省察する機会を設けた。

2) 体操前の健康チェック

地域住民を対象に順次、健康チェックを行った。参加名簿への記名の促しや手指消毒、体温計測、体調確認を行いつつ、自ら、「感染予防対策に協力をお願いします」と声かけを行う姿がみられた。社会状況や看護・医療現場における感染予防の重要性を理解した行動であったと捉えることができる。

3) すこやか健康体操への参加

9時より健康体操が開始される。ラジオ体操第1・第2に始まり、認知機能低下予防訓練動作、ストレッチ、筋力トレーニング、整理体操の順で進められた。学生は、自主的に分散し地域住民の輪の中で健康体操を実施していた。こうした行動について発問すると「地域の方と触れ合うには、かたまらないで広がった方が良いですね」との発言がみられたものの自身の行動とその意義、看護学の知識との関連を見いだすまでには至ってなかった。看護は、その人の暮らしの中で、より自

立した生活に向けて、健康状態に合わせ必要な保健・医療・福祉をつなぐ（日本看護協会，2014）ことが求められる。そこで、伴走者としての関りについて省察する機会を設けた。

4) 呼吸法の伝達・共有

健康増進に寄与するために、情報提供の場として呼吸法について伝達・共有を行った。学生が呼吸法を選択した理由は、「正しい知識をもって腹式呼吸法を実践」及び「日常生活動作にも活用できる」の2点であった。伝達・共有の場においても方法のみの伝達・共有に留まらず、目的と呼吸法の利点、エビデンスを踏まえながら行っていた。

また、参画したすべての日程で伝達・共有の場が担保できるよう、学生自ら調整も行っていた。このような行動は、既修の呼吸に関する知識や方法、行動定着のための行動変容理論の知識を活用したことによると推察される。

5) 地域住民との交流

さらに学生は、「すこやか健康体操は、地域住民にどのような影響をもたらしているのか」を明らかにするために、すこやか健康体操終了後に交流の場を設けた。交流の場では、①参加のきっかけ、②参加して良かったこと、③健康のために心掛けていることの3点に視点を置き会話を進めていた。その結果、「楽しみを見つけるため」、「友人ができた」、「人と話すようにしている」等、様々な目的や期待をもって参加していることがわかった。さらに、教員の助言の基、キーワードを抽出してカテゴリー化をおこなった。その結果、すこやか健康体操が地域住民にもたらす影響は、①新たな友達付き合いの契機になっている、②楽しみ・生きがいになっている、③認知症の予防効果をもたらしている、④健康意識の維持・向上をもたらしている、⑤生活の維持・向上をもたらしている、これらの5つにカテゴリー化された。

なお、この交流から得られた結果については、地域住民の方々と口頭および紙面を通して共有を

おこなった。さらに学生は、地域住民が継続して健康維持・増進が図れるよう今年度の学びや役割を引き継ぎながら、継続して「1. 公園での清掃活動」、「2. 体操前の健康チェック」、「3. すこやか健康体操への参加」、「4. 呼吸法の伝達・共有」、「5. 後片付け・地域住民との交流」を地域貢献として行う必要性についても述べていた。

Ⅲ 教育的効果

大学がおこなう地域社会貢献にはさまざまな形がある。①地域課題を解決するために専門知識・技術を生かすことや②ボランティア活動などを通して若いマンパワーを提供することだけではなく、③地域のパートナーとして課題解決のアイデアを共に考えたり、プロジェクトを推進したりという貢献もある（豊田ら，2014）。本学は看護系単科大学であり、①の貢献の形を重視しながら、地域貢献を進めている。その際、課題解決に実質的な成果を生み出すことができるかということだけでなく、地域貢献のプロセスに教育的意義を生み出すことができるかが、教育機関でもある大学としての重要なチャレンジである（豊田ら，2014）とも言われている。今回、参画した「すこやか健康体操」は健康維持・増進に関わる地域貢献活動である。つまり、看護学の専門性と技術の能力が求められる。学生は活動当初、しんどいという思いがあったと言う。一方、活動終了後には看護学生として継続した地域貢献が必要だと認識していた。つまり、ネガティブに捉えていたことがポジティブな捉え方に変化していた。省察を促すことにより地域貢献活動を進めていく上で、看護の知識・技術をどのように活かすことができるのかについて認識できた結果ではないかと推測する。今後は、学生が地域社会のなかで人的リソースとしての役割を果たせるよう地域貢献活動を素材とした教育的支援が教員には求められる。

Ⅳ まとめ

今回、地域貢献活動（すこやか健康活動）を素材とし、看護大学生への「健康を志向する態度を人々が身につける支援」を体験する環境を整えた。その結果、学生が既習の知識を活かせるよう省察の機会を設けることで教育的意義を見出していることが示唆された。

参考文献

- ・井上深幸(2021). 看護学教育における「健康教育」への布石. 京都看護第6, 29-30.
- ・公益社団法人日本看護協会 (2015). 2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン～いのち暮らし・尊厳をまもり支える看護～, 9-17.
- ・豊田 光世, 内平 隆之, 井関 崇博他 (2014). 大学の地域貢献活動の教育効果に関する考察—Enactus の事例をもとに—. 兵庫県立大学環境人間学部研究報告第16, 59-66.
- ・東めぐみ, 河口てる子 (2022). 看護実践の語り合いによる看護師の気づきと行動 ～看護実践を語る会を用いたアクションリサーチ～. 日本看護科学会誌, 42, 91-100.